Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-15

古典語における時に関わる文法形式の意味・機能―体系変遷記述に向けたキ・ケリ・ツ・ヌのモデル化―

井上，高輔

(Degree)
博士（文学）
(Date of Degree)
2021-03-25
(Date of Publication)
2022-03-01
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第7943号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007943

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

論　文　内　容　の　要　旨

論文題目：

古典語における時に関わる文法形式の意味・機能

――体系変遷記述に向けたキ・ケリ・ツ・ヌのモデル化――

氏　　名　：　井上　高輔

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名　（主）　鈴木　義和　教授

（副）　岸本　秀樹　教授

（副）　石山　裕慈　准教授

本研究は、「文法形式はなぜ・どのように通時的に変化するか」、「古代語から現代語にわたって、時に関わる文法形式とその体系がどのように変化してきたか」、「古典語と現代語とでは、「体質」そのものが変わったという可能性はないのだろうか」、「形式群の変遷が起こる準備的段階として、上代・中古にどのような環境が整っていたか」、といった関心を背景としている。その背景のもと、「古典語の時に関わる文法形式であるキ、ケリ、ツ、ヌが、ごく限られた慣用的表現を除いて、なぜ消えたか、その理由ないし背景を究明するために、それぞれの形式の意味・機能をモデル化し、競合関係を見る」ことを主眼とした。まず、キ、ケリ、ツ、ヌのモデル化を行うための準備段階として、テンス・アスペクトと〈基本形〉（＝時に関わる文法形式が接続していない動詞・形容詞）の扱い方を検討した。ここでいう「時に関わる文法形式」とは、述語部分に現れて時の様子を言い分ける要素のことで、古典語においてはキ、ケリ、ツ、ヌ、タリ、リが挙げられ、現代語においてはタ、テイルがあげられる（詳しくいえば、ヲリ、テアル、テオル、ハジメル、ツヅケル、オワル、テシマウ、ダス等の形式や、それら各形式の複合形式も含まれる）。本研究では、基本的に『日本語歴史コーパス』の上代・中古の用例を対象とした。

第一章では、テンス・アスペクトと〈基本形〉についての扱い方を、先行研究を検討しながら決め、後の章や今後の研究で各形式のモデル化が行えるような基礎を固めた。〈基本形〉を取り上げて検討することが、テンスの取り扱い方を考える上で必要であっただけでなく、時に関わる文法形式の体系を明らかにするという観点からも、〈基本形〉そのものの体系内での位置付けを明らかにする必要があった。

結論としては、次の立場を取るのが妥当であるいう考えに至った。まず、テンスとは時間軸と「基準時」と事態で構成される主体的な範疇であるが、アクチュアル（現実的）な場合と非アクチュアル（非現実的）な場合があり、ある文や形式がテンスであるかどうかは曖昧な場合がある。そして、〈基本形〉は、もともと素材的・概念的でテンスレベルにない状態だが、場合によってテンスレベルで意味・機能を発揮する。ただし、テンスレベルに至るかどうかは、やはり曖昧である。これら〈基本形〉の事情は、古典語でも確認された。更に、〈基本形〉の時間的意味・機能が不完成相から完成相に変化したと見るべきか、素材的・概念的に提示しがちだったのがそうではなくなったというふうに「かたり」方の癖が変化したと見るべきかと考えた場合に、どちらかと言えば後者の方が無理がないと考えつつ、断言は保留する。なお、「はなしあい」と「かたり」の違いと関係性及びタクシスについて踏まえておく必要がある。

また、従来、アスペクト形式としての意味・機能が記述されてきており、かつ、テンスとしての機能も一部に認められる場合があるツ、ヌについても、「テンスか否か」というより、「テンスらしく振舞うのはどんな時か」という視点を持って整理する必要があるのではないかという問題を導出した。

第二章では、キ、ケリのモデル化を行った。キ、ケリについての先行研究の意見、主張は、様々なアイデ

アをそれぞれが複合させるような形となっており入り乱れているが、それらを解きほぐせば、いくつかのパターンとして把握することができる。まず、キについては、「過去的な意味・機能」を持つものとして見解が共通していると見られるが、パターンとしては大きく二つに分けられる。一つは「過去」を意味するというだけのものであり、もう一つは主体的な経験に基づく「回想」を意味するというものである。この問題には、テンスという枠組みをどう捉えるかという立場の問題が絡んでいる。また、この二つ以外に、傍系の指摘として、キが表す過去の範囲を「発話時から見ておよそ昨日以前に限る」という意見や、「キで示せる過去の範囲は、基準時から見ておよそ人の一生の期間まで」という意見もある。そして、ケリについては、どの時点の事態を指すかという観点から、「現在のこと」を指す、「過去」を指す、「過去から現在にわたる期間」を指す、「未来」を指す、という言及があり、特に古い用法では、「継続」というアスペクト的な意味・機能があったのではないかという指摘があり、「かたり」の構造内や物語中の地の文におけるテクスト的機能を把握することによってケリの意味・機能を説明しようとする立場もある。加えて、「確認判断」や「気づき」「詠嘆」等のムード的な意味があるのではないかという指摘がある。

キについては、まず、単なる「過去」と見る先行研究と「回想」的なものと見る先行研究を確認することで、問題を導出した。次に、キによって表される時間範囲が、基準時から見ておおよそ昨日以前に限られるのではないかという意見と、おおよそ人の一生のスケールに収まるのではないかという指摘を確認し、問題を導出した。

問題を検討した結果、キは、「基準時」から見た過去を表わすものであり、「時間軸」は「現実的な時間軸」も「非現実的な時間軸」もありうることがわかった。「現実的な時間軸」の場合、「基準時」は、「発話時」や「詠唱時」、「記述時」がありえ、「非現実的な時間軸」の場合、「基準時」は、反実仮想による「可能世界の基準時」となる。

ケリについては、どの時点を指すかという問題、「継続」用法があったかどうかという問題について先行研究の議論を踏まえて検討することで、モデル化を行った。検討の結果、ケリは、「基準時」から見た過去に事態の生起時点が位置付くという結論に至った。この点、キとは違って、「基準時」にあっても事態が続いている場合がある。「時間軸」は「現実的な時間軸」も「非現実的な時間軸」もありうることがわかった。「現実的な時間軸」の場合、「基準時」は、「発話時」や「詠唱時」、「記述時」がありえ、「非現実的な時間軸」の場合、「基準時」は、想像による「可能世界の基準時」となる。

「あなたなる場」理論については、未来のことをも対象としうると考えるならば本モデルと齟齬を来すが、語り手の視点に着目すれば、未来のことをも対象としうると考える必要はなくなり、特に「あなたなる場」理論と本研究のモデルの間に矛盾関係は見られなくなった。

第三章では、ツ、ヌの意味・機能をアスペクトや動作態の観点からモデル化しようとする先行研究で議論されている内容を検討し、それをブラッシュアップすることで、ツとヌのモデル化を行った。加えて、このモデルと第一章での結論を併せ考えることで、ツがテンスレベルで機能するようになるメカニズムを説明した。更に、ツ、ヌが接続する語彙に偏りが見られることについて、本モデルからの解釈を提示した。

多くの先行研究では、事態毎の内的時間展開のモデルが曖昧なため、ツ、ヌについて、一貫性のあるモデル化を行うことが困難になっている。そのような中、基本的な考え・姿勢が一致しており、ツ、ヌで意味・機能をそれぞれ一本化させたモデルを提示している先行研究がある。そのようなモデルを提示している先行研究としては、中西（1957）、吉田（1992）、大木（1993）、竹内（1993）、井島（2011）がある。特に、井島（2011）は、事態毎の内的時間展開を精緻にモデル化しようとしており、本研究としては着目する必要がある。

井島（2011）で示された三種類の事態の内的時間展開構造について、「変化事態」を「三局面事態」、「行為事態」を「五局面事態」と名称を改めた。ツ、ヌの指すものについては、点的解釈を改め、事態間の移行関係であると捉えなおした。これによって、井島（2011）にはなかった時間的ギャップ構造をツ、ヌのモデルの中に生み出し、ツがテンスレベルで機能するようになるメカニズムを説明付けた。また、一局面しか内的時間展開を持たないと考えられる形容詞について、テンスの時間軸に定位する形でツ、ヌが必要とする局面が得られるようになることを説明した。特に、形容詞にツが接続する場合は、「過去」の意味合いが出つつも、用例によってその「過去」らしさの強弱があることを、本研究のモデルから説明した。

また、ヌの承接が起こりにくいパターンとして、「ず」「見る」「宣ふ」を取り上げた。「ず」は、事態開始前局面の認識の難しさが、ヌの承接が起こりにくいことの背景にあり、「見る」「宣ふ」は、ヌ、ツどちらの選択も許される状況にあって、ヌを選択した場合には、特殊なニュアンスが生じることが、ヌの承接が起こりにくいことの背景にあることを見た。また、ツの承接が起こりにくいパターンとしては、「色付く」「咲く」「枯る」「散る」「別る」「絶ゆ」「暮る」「更く」「明く」「忘る」を取り上げた。これらの動詞は、事態終了後局面の認識の難しさが、ツの承接が起こりにくいことの背景にありつつも、「明く」「忘る」においては、特殊な文脈に支えられて、ツの承接した用例が存在することを見た。

以上が各論の要旨であるが、これらを総合した結果、上代・中古においては、共時的に、キ、ケリ、ツでテンス機能に重なりがあることが見え、ヌはタリ・リとアスペクト的側面で重なりがあることが示唆された。これら機能の重なりがあったことは、その後の時代において形式が減っていくことの要因になっていたと見られる可能性を示唆している。

［ 課程博士用 ］

（ 別紙１ ）

論文審査の結果の要旨

氏　　名	井上 高輔
論 文 題 目	古典語における時に関わる文法形式の意味・機能 ――体系変遷記述に向けたキ・ケリ・ツ・ヌのモデル化――

要　　旨

本論文は、日本語の時に関わる文法形式の体系が古代語から現代語へとどのように変化してきたかを解明するという大きな研究目標を見据えた上で、まず、古典語（上代語・中古語）の動詞・形容詞の〈基本形〉と時に関わる文法形式「き」「けり」「つ」「ぬ」の意味・機能のモデル化を行い、古代語におけるテンス・アスペクト表現の実態を明らかにすることを目指すものである。

第一章では、時に関わる各文法形式のモデル化を行うための基礎固めのために、テンス・アスペクトという文法カテゴリーと〈基本形〉の性質をどのように捉えるかを議論し、以下のような結論を導いている。テンスは主体的な判断・認識のレベルのものであり、テンス形式は「アクチュアル」ないし「非アクチュアル」な時間軸に事態を定位する。一方、アスペクトは客体的なレベルのものであり、アスペクト形式はそれだけで「アクチュアル」「非アクチュアル」な時間軸に事態を定位することはない。アスペクト形式は事態の観念的・素材的な姿であると言うことができる。〈基本形〉及びアスペクト形式が付された文・節は、素材的・客体的な存在としてあり得る。〈基本形〉による叙述は、素材的・客体的な存在としてあり得るとともに主体的な判断・認識のレベルでテンスとして意味を発揮することもあるが、この両レベル間における〈基本形〉のあり方は曖昧さを持っており、さらに外部からの観察も難しいため、〈基本形〉がテンスとして機能しているかどうかは決めることが困難な場合が生じる。

第二章では、「き」「けり」のモデル化を行っている。「き」については、単なる過去であるか直接体験したことを語る回想的なものであるかという先行研究での対立した見方、及び、「き」によって表される時間の範囲が基準時から見ておおよそ昨日以前であり、人の一生のスケールに収まるものであるとする先行研究での指摘について実例を検証した結果、次のような結論を導き出している。「き」自体には直接体験したという意味はない。「き」が直接体験していないことに用いられる場合があることについては、直接体験していないことを断定的に述べたてることはふつうしないのであるが、何らかの権威によって事実とされている場合には、直接体験していないことでも断定的に述べたてることが可能になると説明する。そして、「き」は、「基準時」から見た過去を表わすものであり、その「時間軸」には現実的な時間軸も非現実的な時間軸もあり得る。現実的な時間軸の場合、基準時は発話時、詠唱時、記述時があり得、非現実的な時間軸の場合、基準時は反実仮想による可能世界における基準時となる。

「けり」については、過去・現在のどの時点を表すか、及び、継続用法があったか否かという先行研究で盛んに議論されてきた問題を踏まえて実例を検討した結果、次のような結論を導き出している。「けり」によって表される事態は、「基準時」から見た過去にその「生起時点」が位置付けられるものである。つまり、「き」とは異なり「基準時」にあっても事態が継続している場合がある。その意味で、「けり」の本質的意味・機能はテンスとは異なる範疇のものである可能性があるが、たとえ消極的であっても「けり」は非未来の事態を語る際に用いられるものであるから、「けり」はテンスの枠組みの中で捉えるべきものである。「けり」における「時間軸」及び「基準時」は、「き」と同様のあり方であると言うことができる。

第三章では、「つ」「ぬ」の意味・機能をアスペクト及び動作態の観点からモデル化している。現在最も有力であると考えられる、「つ」が「動作の完了」ないし「過程の終結」を表し、「ぬ」が「状態の発生」ないし「過程の始発」を表すという説について検討し、その説が「つ」「ぬ」が指す局面を点的なものと捉えている点に問題があることを明らかにする。そして、「つ」は「事態中途局面」から「事態終了後局面」への移行を捉えるアスペクト形式であり、「ぬ」は「事態開始前局面」から「事態中途局面」への移行を捉えるアスペクト形式であるという結論を導き出している。「つ」がテンスレベルで機能することがあることについては、それは「基準時」である発話時が「事態終了後局面」に重なる場合であり、その場合には「事態終了」時点は過去に位置付けられるからであると説明付けている。さらに、「つ」「ぬ」が接続する語彙に偏りあることについては、その語の表す事態によっては「事態終了後局面」「事態開始前局面」等を認識することが難しいことが原因であると説明付けた。

以上の議論を踏まえて、上代・中古においては、共時的に「き」「けり」「つ」でテンス機能に重なりがあること、「ぬ」は「たり」「り」とアスペクト的側面で重なりがあることを指摘し、これら機能の重なりがあったことがその後の時代において時を表す文法形式が減少していく要因になった可能性が高いとの判断を示した。

本論文は、個々の論証にいくぶん性急な部分があること、先行研究や用例の扱いに十分な配慮が行き届かないところが見られるなどの問題点はあるものの、「日本語歴史コーパス」を利用して豊富な実例を精査し、既に議論しつくされた感もある古典語のテンス・アスペクトの問題に斬新な切り口から新たな理解を示した点で高く評価できるものであり、今後の研究の進展も大いに期待できるものである。

以上の審査結果から、本審査委員会は全員一致で論文提出者、井上高輔氏が博士（文学）の学位を授与されるに足る資格を有するものと判断した。

主査記載 氏名・印	鈴木 義和

審査委員

区　分	職　名	氏　　名	区　分	職　名	氏　　名
主　査	教授	鈴木 義和	副　査	教授	福長 進
副　査	教授	岸本 秀樹	副　査	教授	實平 雅夫
副　査	准教授	石山裕慈			